

開業医における医療情報提供の現状についてのアンケート調査

○旭爪伸二、青山 修、入江広和、梅田浩輔、
大山直生、杉尾隆夫、立川俊介、辻 昌裕、
松井孝文、松田 聡、松永昌之

宮崎小児歯科臨床懇話会

目的：現在、医療情報提供の在り方やレセプト開示についての論議が多くなされている。今回、我々の地域の一般開業医において、小児歯科領域も含めた医療の情報提供がどの程度行われているかを調査する目的で、アンケートを実施した。

対象および方法：対象は、宮崎市内およびその周辺で開業する歯科医師55名（男性53名、女性2名 平均年齢37.9歳）と、子供を歯科医院に受診させた経験を持つ患者52名（男性10名、女性42名 平均年齢34.4歳）である。患者の場合は発表者の歯科医院を受診した者各2～3程度と、3歳児健診を受診した者などに解答を依頼した。

結果および考察：カルテの開示を30.9%の歯科医師が反対していたが、患者側の反対はなかった。医療情報提供が不十分と感じる歯科医師は60%おり、患者の「不十分」と「全く不足」を合わせた50%を上まわった。小児歯科領域では、歯科医院で明示している、あるいは知らせていると解答のあったのが、6歳未満の5割加算が12.7%、齲蝕多発傾向患者の定期健診の保険適用が16.4%、フッソの保険適用が27.3%にとどまり、患者の大半も「知らない」と解答した。母子分離について患者は86.5%が保護者または双方の判断により行うべきと考えており、医療スタッフの判断に任せる意見は少なかった。小児の治療方針について、保護者と相談するかという間に、歯科医師は「よくする」あるいは「時々する」と全員が答えたが、相談を受けたかの間に患者は50%が「ない」と答え、歯科医師と患者の意志の疎通は必ずしも十分でないと思われた。

5年間の高島小中学校歯科保健管理の推移

○山口 香奈美・牧山 俊美・田本 佳代
有田信一

長崎 ありた小児矯正歯科

当院では高島町（人口約1000人）の乳幼児（平成1年から）および小中学校（平成3年から）を対象に歯科保健管理を実施してきた。小中学校では年3回の歯科健診と指導を行い、平成4年からは週1回法でフッ素洗口を行った。前回の第14回小児歯科学会地方会では乳幼児を対象とした歯科管理の結果を評価し、発表した。

今回は乳幼児から学校まで、一貫した保健管理を行う中で、学校歯科健診結果の5年間のう蝕の推移から、フッ素洗口を中心とした歯科保健管理の効果の評価を行い、併せて、乳幼児期における歯科保健指導管理が学童期のう蝕の状況へ、どのように反映するかについても考察を行った。

対象と方法：高島小中学校全生徒（H4-H8年度：累計250名）のう蝕の健診結果（同一検診者、1名による）を用い、評価を行った。

結果：1）5年間で中学3年生のう蝕の比較に於いて、DMF-index が13.0から3.6へ、有病歯率が46.9%から、13.4%へ減少した。

2）入学直後の小学1年生の健診結果の比較に於いても、DMF-index が2.0から0.6へ、有病歯率が100から10.6%に減少していた。

考察：乳幼児のう蝕が多い地域に於いても、歯科の定期健診とフッ素洗口の継続により、地域的に永久歯う蝕の減少を期待できることが判った。今後、う蝕予防の効果的な方法について、事業を継続しながら、検討を加えていきたい。